

女の視点で見る農業経営

第9回

“仕事”と“結婚”、私たち

はそれが一致したけれど…



小松 真知子 さん

こまつ・まちこ 昭和32年3月2日生まれ。千葉県東葛飾郡関宿町の第2種兼業農家に生まれる。埼玉県立春日部女子高校を卒業後、千葉大学園芸学部農業生産管理学科へ進学。そこで博文さんと出会う。卒業後は中国農業試験場（広島県福山市）の研究者として5年間勤務。昭和58年12月博文さんと結婚。翌年4月就農し、家族と共にキャベツ、ハクサイ、レタス類の栽培に取り組んでいる。家族は義父昭三さん（68歳）、義母すみ子さん（67歳）、博文さん、真知子さん、瑞季ちゃん（5歳）、大介くん（2歳）、千紘くん（2歳）の7人。

「小誌14号掲載の「うちの土ではどう作る？」に

登場した、長野県北佐久郡望月町の小松さんを訪ねた。95年11月には、圃場造成時に露出したと思われる粘着性の強い心土に悩まされていた。土壌調査の結果、農業技術コンサルタントの関祐二氏により「土地改良よりも入れ替えを」とのアドバイスを受け、さっそく翌12月、20aの客土を実施したという。その後の経過はどうだろうか？

「9月に出荷したハクサイは、客土をした場所の作柄は良好でしたが、しななかった部分は芯腐れ障害が出てしまいました。思い切つて客土に踏み切ったのは、正解だったようです」

と、小松博文さん（40歳）。小松さんは、早速妻の真知子さん（39歳）と、その体験をまとめ、レポートをスガノ農機の「有機物循環農法体験記」のコンテンツに応募。見事優秀賞を獲得した。

真知子 「ほとんど彼が書いたんですけど、最終部分だけ、私が書いたんですよ」

博文 「あの時は、どうしても出掛ける用事ができて書けなくて締切り間際のギリギリになって、電話で『あれと、これと書いていてくれ』って頼んだよな。俺が全部書いてたら、もっと成績よかつたかもしれない」

真知子 「まさかあ。私が手を加えなかつたら、入賞も危うかつたかも……」

そんなくつたのない二人のやりとりを聞いていると、気の置けない雰囲気の中に、がっちり信頼関係で結ばれた仕事仲間という感じが伝わってくる。それもそのはず、二人は大学時代の同級生なのだ。

机より、畑の上で農業を

真知子さんは、千葉県・関宿町の出身。父親は小学校教員で、母親が家の田んぼを預かる兼業農

家に生まれた。

「母は農作業が好きな人でした。田んぼに出ていると機嫌がよかつた」

大学進学の際は、教員を目指して教育学部に進むことも考えたが、「人間よりも植物と付き合う方がいい」と考え、千葉大学園芸学部へ進んだ。そこで博文さんに出会ったわけだが、二人が所属していたのは「農業生産管理学科」。作物、畜産、農業経営……なんでもありの総合農学科のようなところだったが、学生時代の頃は、別段「自分は農業に向いている」という実感はなかつたという。

大学卒業後は、国家公務員試験を受け、農水省系の研究者への道を選ぶ。配属先は、広島県福山市の中国農業試験場。そこで真知子さんは、農業経営の中でも農村の生活や、普及に関する研究を専門に続けていた。

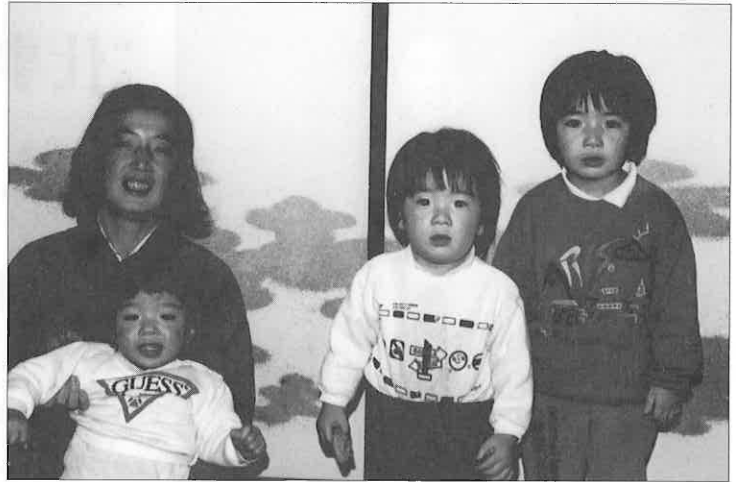
「研究機関だから、まわりには頭の良さそうな男の人がいっぱいいました。だけど私は、本読んで机の上に座っているより、畑にいる方がいいみたい……」

一方博文さんは、卒業後、長野の実家へ戻って両親と共に農業に従事。父・昭三さんと母・すみ子さん夫妻は、長年大根の栽培に取り組んできたが、博文さんが加わり、キャベツ、ハクサイを主力に大変換。ゼロからの取り組みだったので、試行錯誤を重ねていた。

また、真知子さんは調査・研究を続けながら、「机の上で」農村の今後について考えていた。

「農村には若い人が少なく、衰退傾向をたどる一方。そんな研究ばかりしていると、『私、ここより農業の現場に行った方がいいかもしれない』と思つたり……」

長野と広島に離れ離れになっていた二人だったが、その後もお付き合いは続いていて、真知子さんが千葉の実家に帰るときは、いつも長野経由。「西日本一のバラ園に嫁に来ないかなんて見合い



右から長女の瑞季ちゃん、双子の大吉君と千紘君

の話もあつたけど、農家ならどこでもいってわけじゃない。気心も知れてるし、けっこう私の意見も取り入れてくれそうなんだから。試験場はせっかくな入れた職場だったから、辞めたくないという思いもありました。でも結局安定した公務員より、不安定な農業を選んできましたのね(笑)。結婚と同時に転職もしましたよって感じでした」
そうして、昭和59年の春から、真知子さんは毎日畑へ出るようになったのだった。

出産で収量は半減

「転職」といっても、真知子さんは大学と試験場でガッチリ農業経営を学んできたのだから、その知識が経営面にフルに生きたものでは？
「最初のうちは、経営学なんてちつとも役に立た

ない。技術力がなくつちゃ。ちゃん作物ができれば、電卓打つてもしょうがないもの」
学生時代何度か実習の体験があつたとはいえ、商品としての野菜栽培に携わるのは初めて。真知子さんには、種まき、育苗、草取り、肥料の選択、収穫、出荷……農作業のひとつひとつのプロセスを体験していくことが、新鮮に感じられたという。

そんな風にやる気満々で農作業に精を出していた真知子さんだったが、ひとつだけ物足りないと感じていたことがあつた。それは農業技術をさらに勉強をする場や機会がないこと。

農協の技術検討会などに出て来るのはいつも男性ばかり。夫についていっても、断片的な知識の習得ばかりで、すぐ役立つとも思えなかつた。そこに舞い込んだのが、長野県の「農業士」の資格をとる道だつた。

実をいうと、これには先に博文さんがチャレンジしていたのだが、農閑期はスキー場の指導員の仕事に忙しく、途中で断念。そこで昭和61年の秋、真知子さんが「それじゃ、私が取るわ」と一念発起し、ひと冬かけて勉強し、農業士の資格を得た。これは真知子さんにとって、得難い経験だつた。県内の農家に同世代の仲間がたくさんできた上に彼らからすぐに役立つ生きた情報が得られるようになった。

「レタスを私たちよりずっと上手に作っている産地の人たちと話ができる。品種は何？どうやって詰めるの？根コブ病対策は？そんなダンナの知らない情報もちゃんと入ってくる。するとだんだん一目置いてくれたり……」

もうひとつの「農業士効果」は、研修の一環として、真知子さんが小松家の経営状況を客観的に理解するようになったことだ。資料や貯金通帳をひっくり返しつつ、データをとりうちに、いつの間にか経理に関しては真知子さんが一番詳しくな

つていたという。

そして平成3年に長女の瑞季ちゃん、6年には双子の大吉くんと千紘くんを出産。結婚して8年間ずっと農業経営の主軸として働いてきた真知子さんが、妊娠・出産のために第一線を退くことは小松家の農業に大打撃を与えた。平成5年にはキャベツ、ハクサイ、レタス類を、合わせて4万ケース弱出荷していたが、2度目の出産をした年の収量は、その半分程度になつてしまった。

真知子さん一人の労力もさることながら、それまでお願いしていたパートのおばさんの手配から送り迎えまで担当していたから、その分の労力もダウンしてしまうのだ。

その上、真知子さん自身、出産前は入退院の繰り返し。出荷に出掛けようとする博文さんに「病院へ連れて行って」とお願いすることも少なくなかつたという。

「それまでバリバリ働いていたのに、急にひ弱な妊婦になってしまった……」

これが果樹園や酪農家であれば、たとえ赤字になつても人件費を捻出しなければならぬだろう。

けれど、小松家は野菜農家だから、思い切つて作付けを減らすこともできる。無理をして例年の収量を確保するより、作付けを減らして、家族だけでこの年を凌ごう。それがこの年の小松家の総意だつた。

それまで真知子さんは、毎日畑に出る「表方」を担当していたが、出産を期に「裏方」のすみ子さんと交代。家事、育児全般を担当するようになっていた。

新しい力と夢を育て

そんな慌ただしさの中、博文さんは今年、「J A長野県青年部協議会」の会長を務めるようにな

女の視点で見える農業経営



遠距離から至近距離へ

った。11月にはローマで開かれた、国連食糧農業機関（FAO）の世界食糧サミットにも参加している。

「うちのダンナは自分だけでなく、みんなで成長していきたいタイプ。産地に育てられてきたから今度は恩返しをしたいと。今農協も厳しいし、なんとかしないといけない。やっぱり”長”と名のつく限り、ちゃんとやらないと」

そんなわけで、博文さんが家を空けることも多くなった。

そんな小松家に新しいメンバーが加わったのは平成8年5月。新規就農を目指す、真下良二さん（31歳）だ。それまで北海道の借地でジャガイモ、カボチャなどを作っていたが、できればいずれは東京に住む両親から、あまり遠くない場所で農業を営みたいと考えていた。

そこで、先に望月町で新規就農者として自立していた人を訪ね、相談を持ちかけたところ、博文さんを紹介してくれたのだ。

ちょうど小松さんのところでも、「誰か専属の人を雇いたい」と考えていたところ。「渡りに舟」とはこのことで、真下さん一家は早速研修生として小松家へやってきたのだ。

「いきなり来いっていうダンナにもビックリだけど、真下さんも勇敢だよ。妻子があるのに北海道からパッと来るなんて」

現在は、町営住宅から、小松さんの畑に通っている。新たなパワーが加わった上に、7月からは育児休業明けの真知子さんも「裏方」から「表方」に職場復帰を果たした。

ハクサイ2・7ha、キャベツ2・4ha、レタス類1・8ha。出産でダウンしていた収量も元通り。さらに新たな試みとして0・9haニンジンの作付も加わった。これは新たな冬場直前の現金収入と、アブラナ科連作障害対策にもなる。

小松家における「真下効果」は、目に見えないところにも及んでいる。

「若くてやる気もある。経済的に決して楽ではないけれど、彼にいてほしいと思います。それこそ私がダウンすれば大打撃を受けるような家族労働には限界がある。彼のような新しい人間の力がなければ、これからの農業は発展性がない」

今でこそ、研修生の身分の真下さんだが、今後は彼とその家族の福利厚生面を考えて、法人化も検討中である。そしていずれは彼の協力も得て安定供給可能な新しい作物にチャレンジしたいとも考えている。さらに真知子さんが今後の課題として検討しているのは「重労働からの解放」だ。夏の収穫期、重いキャベツやハクサイを出荷し続ける作業は、体にかかなりの負担を強いられる。

「あのキツイ部分さえなければ、いい仕事だと思います。いずれは、もっと楽にできるやり方を探していきたい。それこそ若い女の子にも働いてもらえるような形で。法人化して会社組織にするとかして、楽で安定的な経営を目指したい」

と将来の展望を語っている。

さらに真知子さんは、こんなことも言っている。「農家の女性ばかりが、いつまでも仕事と結婚がセットになっているのは、おかしいよね」

まさにその「セット」の人生を、自ら選択した真知子さんだが、それは生涯の伴侶として博文さんを、一生の仕事として農業を選んだから実現したまでのこと。この二つが「偶然」もしくは「無理やり」一致しない限り、女性はなかなか農業に参加できない、この構造に限界がある。

女性の職業選択の幅がこれだけ広がっている中で、老舗の商家や一部の自営業を除けば「結婚と仕事は別物」というのが、ごく一般の女性たちの考え方だ。そんな中で農業ばかりがいつまでも、結婚と就職をセットの人生を要求し続けている。これでは仮に非農家出身の独身女性が、「ちよつと農業を……」と思ったところで、二の足を踏んでしまうのは無理からぬことだろう。「ちよつと」のつもりが、年がら年中「嫁に、嫁に」の目で見られてしまう。体力的な辛さよりも、むしろそんな空気が、却って女性たちを遠ざけているのではないだろうか。

だからといって「農業」そのものは、決して女性に不向きな仕事ではない。「職住一致」のライフスタイルや、「命を育む」といった本質的な部分も含めて、常に他の職種にはない魅力の輝きを放っているのだから。

これから農家側がシステマ的にも、精神的にも門戸を開けば、独身女性ももっと気軽に、既婚女性ももっと手軽に農業に接することができるはず。その中から「天職」としての農業に目覚める人がきつと現れる。「嫁」の一本釣りをするより、その女性が新しい「経営者」として伸びてゆけばいい。真知子さんに出会って、そんな「新しい女性経営者」の出現を夢見てしまった。

（取材／文・三好かやの）